

第六章 御心が行われますように

数年来の知人であるその婦人は、わたしを傍らに呼び、声をひそめて言った。「神父さま、わたしの秘密をお見せします。いらして下さい！」

わたしは部屋に足を踏み入れた。ベッドには彼女の息子が横たわっていた。その子は、奇怪な姿をしていた。体は小さく、まるで幼児のようであるのに、頭部のみは大人の頭のように膨れあがっていた。その目はうつろに天井を見つめ、赤い舌がヘビの舌のように、盛んに口から出たり入ったりしていた。

「何と、これは……！」わたしはことばもなく、うめきをもらした。

「神父さま」と母親は言った。「わたしはこの子を八年間世話してきました。この子が見かけることのできるのは、わたしだけです。わたしにはこの子がいとおしくてたまりません。でもこのことを知る者はほとんどいません……」。

それから彼女は「神さまは本当に善いお方です。わたしたちの父です……」と言いきつ

た。

そして天を見上げると、穏やかにつぶやいた。「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」。

母親が口にしたのはこれだけであった。しかしすべてが言い表わされていたのである。

わたしは頭を垂れ、無言でその場を離れた。その子の姿はわたしを驚かせ、母親の態度はわたしを困惑させた。わたしの心にあった思いはただ一つ「婦人よ、あなたの信仰は立派だ！」（マタ一五28）だけであった。

「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」という主の祈りのこの三番目の祈願を理解するために、われわれはまず、これまで論述してきた文脈を振り返ってみる必要がある。⁽⁷⁵⁾われわれの視線は天に上げられ、われわれの面は^{おもて}ひたすら神に向けられている。悲惨に満ちたこの世界、そして歴史に何の意味も見出せないような状況のもとで、われわれはあえて「われらの父よ」と呼びかける。この世は、神を認めず、神の聖なる御名（神の實在）を汚すのみである。われわれは心の奥底から熱心に「御名が崇められますように！」と祈る。新しい天地が、イエスの降臨、イエスのことば、イエスの存在によって、すでに現われ始めている。神の国は実現の段階に入っているのである。しかし不幸なことに、それが完全に現実のものと

なる時はまだ引き延ばされている。われわれは切実な期待を込めて祈る。「御国が来ますように！」と。

われわれがいかにか懸命に祈ろうと、またイエスのあとに付き従い、骨身を惜しまず良きことを実践しようと、われわれは神の国が近づいているのを現実に見ることは決してない。反キリスト的行為があちこちで続けられ、悪魔に従う者がいる。われわれは寂しい気持ちに襲われるであらう。なぜ神はぐずぐずしておられるのであらう？ 結局、神のご意志とは何なのであらう？ それでもなお、われわれは祈る。「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」と。この祈りが真に意味するところは何なのであらうか？ 神のご意志を知り、そしてわれわれ自身の願いと神のご意志がどうすれば等しくなるのかを知り、また歴史上の苦しみの中にどんな価値を見出すべきなのかを知ることが重要なのである。

神の意志とは何か？

これは、宗教的な人なら誰でもが直面している最も基本的な問いの一つである。われわれは神の意志に従って生き、行動したいと思っている。しかし、具体的に、ある与えられた状況の中

もとの神の意志はどのようなものだろうか？ われわれはどこに神の意志を見出せるだろうか？

その答えを探し求める前に、われわれは、「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」という願いの背後にある体験に思いを馳せ、これを吟味してみる必要がある。この祈りを口にする人は誰でも、われわれの生きるこの世は神の意志を映し出したものではないと思ひ、人間は神の意志に反した生き方をしている、と気づいている。すでに見てきたように、われわれ人間の歴史は、神の意志に従うのに抵抗しているし、正義は沈黙させられているかに見えるし、金持ちには貧しい者を犠牲にしています。肥えふとり、貧しい者は社会、経済的エリートたちの生産過程のためにますます「燃料」の類のものと化している。エリートだけが生活や生き方を自らの手で計画できる。大多数の人間は、その望むことも適したこともできず、その社会的地位によって決定されたことしか出来ないのである。

これら全ての苦しみから発して雷のように沈黙の抗議が天に向かって駆けのぼっていく。この苦しみ、人間が人間を抑圧し、力のある者が弱者を踏みつけにするようなこの苦しみから。何百万もの人びとが、泣きながら涙の洪水の中に溺れ、疲れ切っていて、その人々の心の中に、この世に解き放たれた全ての悪霊たちが入りこんでいる。それら全てを追ひ出し、人々の心を聖めることも出来そうにない。そして、われわれは、すでに自分自身を受け入れることす

らきわめて難しい事態に立ちいたっている。「他者」と出会い、交流する道が、ほとんど動かすことのできない障害物によって、阻まれてしまっているのである。「御心が行われますように」と祈る者は、現在のこの状況下で絶望に陥ろうとする誘惑をはねのけ打ち克つてきたのに違いない。

われわれはまた、神の意志に従うことを拒絶する者たちの側に、ある種の沈黙の抗議を見たとすることが出来る。あるたじろぎ、自己中心主義があり、これが、神の意志と調和がとれていくかどうかを問うことなくして、自分自身の意志を主張しているのである。現実の歴史の姿に落胆した多くの人々は、矛盾に満ちた暗うつな筋書きの中にも至高の意志が見出されることを、むしろ歴史もそうした意志を徹底的には隠蔽し得ないことを、どうしても認めようとはしない。こうした見方や態度に根ざす抗議が、明からさまに噴出するのも、決して珍らしいことではない。「御心が行われますように」と祈るということは、自分自身を乗りこえ、それまでの自分を脱却するということであり、人間の悪い意志が存してもなお、神の愛の力を信じることであり、さらに人間の悪意は、神の恵みによって克服され得ると確信することである。

われわれは、主の祈りの中のこの嘆願に含まれるすべての意味、内容に耳を傾けなければならない。神の意志に関わる問題は多岐にわたり、それぞれが深い奥行きを持っているために、ここではそのすべての主要点について語ることはしない。問題をイエスの祈り、主の祈りと関

わりをもつものにのみ絞って、述べていくこととする。イエスにとって、神のご意志とは何だったのであろうか？ この答えは三つのレベルにおいて存在するが、それぞれが明確に区別され、また強調されなければならない。

イエスにとって神の意志とは、紛れもなく、神の国を築くことであつた。それゆえに、すでに述べたように、神の国建設の宣言がイエスの教えの中心テーマとなっている。神は創造の主であることを望んでおられる。そのためには創造物の中の全ての無法な要素（病や、不正な人間関係、力の乱用、死——一言でいえば罪）が征服され、全てが完全無欠なものとならねばならない。こうした事業が完成したその時こそ、神の国が完成するのである。

被造世界を完全に解放し、最上の高みに引き上げるといふのは、神の不変の意志である。イエスは神のこの意志をただ宣言しただけではなかつた。彼のなした行いにより、これを現実のものに変容させたのであつた。この意味において、「御心が行われますように」との嘆願は、その前の「御国が来ますように」という願いの内容を繰り返し、これを強めているということができる。ルカは福音書の中で主の祈りのこの部分を省略しているが、おそらくこの先行する祈願に何ら付け加えるものはないと見て、そうしたのであろう。さらに、マタイによる福音書のギリシャ語は「御心が生じ (genetheto) ますように」であり、これも神の国の到来に向けられた表現の言葉なのである。

ヨハネによる福音書の中で、イエスは明確に述べている。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心をおこない、その業を成し遂げることである」(四34)と。また別の個所では、次のようにも語っている。「わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心をおこなおうとする」(前掲五30)。イエスはさらに、「王国」ということばに今ひとつ加えられてしかるべき意味を加えてこの宣言を明確にしている。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えて下さった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」(前掲六39)。

一人も失わず、相互に助け合いながら完全な生の高みへ達すること——これが「神の国」という表現、言い回しに込められた意味である。神が築きたいと望んでおられるこの王国について、パウロは別の表現を用い、次のように述べている。「神は秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも、地にあるものも、キリストのもとに一つにまとめられるのです」(エフェー9-10)。神の国(あるいは意志)は、すべてが統一され、完全となった時に、現実化されるのである。その仲介となったのはイエス・キリストであり、イエスは神の国、神の意志を宣言し、また神の意志であり神の国であることを示したの

である。

神の国の対極に位置するのが、サタンの国である。サタンは神の意志に対抗する勢力の代表である。サタンはまた、この世の支配者であり（ヨハ一231、一四30、一六11、エフェ二2）、それゆえに大きな力を持ち、組織を維持している。その公生涯でイエスはことばや行いを通じて、このサタンと対決した。（ルカ一二20、マコ三22〜26）。そして十字架上で死んだ時、サタンを手ひどく敗北させた（ヨハ一二31〜32、一四30、一六11、一コリ二8）。しかしサタンはなお隠然とした勢力を誇っている（二コリ四4、二テサ二7）。とはいえ、最後には彼も破滅の道をたどることになるのである（黙二〇10）。

この意味で、神の意志が行われるようにと祈ることは、神自身が王国を実現するようにと呼びかけることを意味する。神はイエスを通し、この王国の実現はすでに始まっていると正式に述べておられる。この観点からするなら、王国の実現は人間の活動や行為をあてにしていけないということになる。それは、神の国なのであり、神はご自身の永遠の計画を実現なさることであろう（エフェ一4）。その計画とは、被造世界を、神自身の存在の証し、神の栄光、神の愛の満ちあふれる場、とすることである。「御心が行われますように」という祈願は、この計画が速かに成就されるよう願うことである。神ご自身がお示しになった世界を、遅滞なく、実現していただきたいと嘆願しているわけである。

われわれはこれまで、神の意志を、神に属するもの、すなわち神の国、神の計画、と考えてきた。しかし、この神の意志には、客観的な側面の他に、主観的な面もあるのである。そしてこの側面は、人間によって受容され、現実のものとされる。他方、神の国（神の客観的意志）は基本的に、贈り物であり提供されるものである。神はいつもまず愛してくださいさるのである。

（一ヨハ四19）。

王国にしろ何にしろ、神から来るものはすべて、提案されるものであって負担とされるものではない。それは招きの意志表示であって、上意下達的な命令ではないのである。これはどうしてかという、神は愛だからであり（一ヨハ四8）、愛とは、自由意志による関与や結びつき、また強制でない勧誘、自発的な受容を根本原則とするからである。われわれは必然的に神の贈り物に対して心を開いていく。聖書は、この人間の心の転換、すなわち回心への呼びかけを發している。神の国のこの世への来臨、われわれの歴史との合体が成るには、この心の回心が必要である。⁽⁷⁶⁾それゆえにイエスは、彼の最初の宣言において、神の国はすでに実現に向かつて動き出していると述べ、同時に、悔い改めて福音を信じるようにと述べている（マコ一15）。神の国は、人間の側からの協力なしに、自動的にやって来るものではない（フィリ二13）。その王国は神のものであるが、われわれによって自らのものとされなければならない。

神はこの世、そして人類を、自らの力によってのみ救済しようとは考えない。神は、われわ

れ一人一人が他の人間の救済の秘跡（サクラメント）となることを望み、この形式を通じて人類をこの（救世的な）計画に関与させたいと思っている。この協力関係は、決定的な意味を持つものであり、これが成就されるか否かによって、われわれの永遠の救済の行く末が決まるのである。ここにおいてわれわれは至高の審判者によって求められる生き方を扱うことになる。特にわれわれが実践するよう求められているのは、抑圧された人びとへの支援、彼らとの連帯、彼らの解放と密接な関わりを持つ行為への参画である。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。……この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである」（マタ二五40、45）。

「主よ、主よ」と呼びかけるだけでは不十分であり、イエスが期待はずれの地味なメシア伝道という弱々しい外観の下に隠していた神秘を解読するだけでは不十分である。つまり「わたしの天の父の御心を行う者」だけが真の救いを得ることができる（マタ七21）。この「御心」とは何であろうか？ 探しに出かけて行ったり、調べたりするまでもない。それは、イエスに付き従って生きることであり、イエスと同じ心を持つこと（フィリ二2、5）であり、山上の説教に示された精神（真福八端）によって導かれるということである（マタ五17）。この回心が、真の新生を生む。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハ三2）のである。

神は、罪びとの死を望まれず、彼らが回心して生きることを望まれる（エゼ一八23、32、三三11、二ペト三9参照）。「神に喜ばれる、完全な、善いこと」とは、「この世に倣うことではなく、むしろ、心を新たにして自分を変えていただく」ことである（ロマ一二2）。パウロも同じことを簡潔に、「実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることである」（一テサ四3）と語っている。そしてわれわれは、「神の御心を行う人は永遠に生き続ける」（一ヨハ二17）という保証を与えられている。われわれは神から神を求める者は誰も神から見放されることはないという約束さえもらっている。それゆえにわれわれは「人間の欲望ではなく、神の御心に従って、肉における残りの生涯を生き」なければならない（一ペト四2）。われわれはまた、「御心をおこなうために、すべての良いものを備えてくださるように」（ヘブ一三21）と祈る。というのも、最終的に「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられる」のは神だからである（フィリ二13）。

われわれが「み心が行われますように」と祈るとき、われわれは神のみ心が、われわれのために行なわれると知っている。われわれは神がわれわれに課される役割に忠実になり、神の国という贈物に信頼し、イエス・キリストの教えと行ない、ご生涯の新しさに一致して生きようとするのである。誰かが神の御心を行う時はいつでも、神の国は、その人にだけでなく、全世界に（²⁷）来るのである。

神の意志にはさらに、忍耐、神の神秘に対する謙虚な服従、あるいはあきらめといった要素さえ関与する。われわれは、神の意志の何たるかを理解している。それは、神の側で、同時に人間の側で、神の国を実現することである。しかし、こうした理解をもつわれわれも、新しい天、新しい地の実現が遅れている理由となると、まるで五里霧中である。神はなぜ、神のこの意志を早々と実現しようとなさらないのであろうか？ 神はなぜ、人間を鼓舞して彼らがもっと早く王国の実現に必要な生き方を決断するようなさらないのであろうか？ 歴史はゆっくり曲折しながら進むばかりである。不正義や不条理、罪深い構造を備えていて、われわれが天に向かつて発する問いかけは、途絶えることがない。こうした問いは、われわれがしばしば最善の企て、この上なく高潔な動機にもとづく行動、最も清らかな動機に発する運動が敗退するのを見るにつけ、ますます当惑させられるのである。心正しい者が社会の周辺部に追いやられ、賢い者が嘲笑され、聖者が死刑に処せられる事態は、今の世の中ではさして稀なことではない。われわれは、何とも薄っぺらな人間が勝利をおさめ、不正直で偏見に満ちた人間が利益をあげ、二流三流の人物が一国の運命を左右しているのを見ている。

このような現実の流れの中で「御心が行われますように」と祈ることは、神の神秘的な計画に、自らを委ねることである。これはある意味で、あきらめであるが、最も楽な道を選ぶというのではなく、最も道理にかなった道なのである。真の知恵というものは、われわれの使

う物差しで、われわれの限りある理性の力をもって測ることは出来ない。天が地のはるか上にあるように、われわれから高く上にある神の知恵の枠組によつてのみ、測られるのである。たとえわれわれがその道を見、理解することが全くないとしても、われわれが、神のこの神秘の細道を受け入れようとするなら、そのときには、われわれはわれわれ自身と、われわれが考え出した計画を放棄する必要がある。それは、たとえ正直で真に神に向けられていた時であつても、われわれは時に自分自身の意志を振り捨てて必要があるということである。より偉大な意志に従わず、あえて自己を貫こうとする意志の反逆心は、人間性のうちの最も人間的部分を表わしてはいない。精神の真の偉大さとは、自らの可能性の限界を認識し、自らの力の有限性を認めるということである。こうした謙虚な姿勢が整つてはじめて、われわれ一人一人や被造物全てを含んださらに超越的な計画のために働くという謙虚な決断が開かれる可能性が出てくる。

「御心が行われますように」と祈ることは、また、神の望まれることが行われますように、と述べるにひとしい。ここには一片の苦情、わずかな絶望も存在しない。あるのは、こどもが母親の腕の中に抱かれようとする時のような、全幅の信頼だけである。神は、無限の善である父親であり、母親である。神には永遠のはからいがあり、われわれもまた、われわれの計画を持っている。幼児が父親の振る舞い、行いのすべてを理解し得ないように、そして父親の発する

ことばの意味を十分認識し得ないように、われわれもまた、いかに目をこらし、いかに努力を傾注しようと、歴史のあらゆる側面を理解するのは不可能であるし、現実におこなわれている事柄の全ての意味を知ること、できない相談である。われわれ自身の視野が限られていることを認め、そのみ手の中にわれわれの全行程があり、始めであり終わりであるお方の手にわれわれを委ねることは、苦痛でもなければ悲嘆でもない。

この自己放棄は、古代西洋文明に生きた哲人たち、たとえばセネカ、エピクテトス、ソクラテス、マルクス・アウレリウスその他に確認できる。⁽⁷⁸⁾ また旧約聖書にも現われるのである（サム上三18、トビ三6、詩一三五6、一四三10、知九13〜18、一マカ三60、二マカ一3〜4参照）。ヘブライ人への手紙の中では、この世に來られたキリストが次のように言ったとある。「あなた（神）は、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために体を備えてくださいました。あなたは、焼き尽くす献げ物や、罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。そこで、わたしは言いました。『御覧ください。わたしは來ました。聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために』」（一〇5〜7）。

ゲツセマネの庭で、暴力的な死を免れ得ないと知ったイエスは、深く苦しんだ。しかし、神の意志に従うという静かな自己放棄が優勢となる。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願ひではなく、御心のままに行ってください」（ルカ二

二42)。ここにわれわれは、イエスの深く真実な人間性を見ることが出来る。イエスもまた、われわれ同様、巡礼者であり、さすらう者なのである。すなわち彼もまた、すぐにはすべてを知り得ない者の不安を共有する者であり、神の意志に近づくすべての歩みを理解している存在ではないのである。

イエスが神の意志を知っていたことは疑いない。しかしその人間としての条件のために、イエスは、すべてが透過して見える神の国の完全無欠性を未だそなえていなかったのである。それゆえに、今この場でイエスは神の意志を具体的に探し求めねばならなかったのである。彼はどんな手段を講じるべきなのであろうか？ また、どうすれば今は知られている神の意志を最もよく実現することが出来るのであろうか？ イエスは彼の人間としての限界と彼自身の不安につき当たった。彼は、彼のメッセージを受け入れない人びとに対して、怒りを感じないではいられなかった。しかし彼はこの状況を受容した。彼を助けに来る天の軍勢を求めなかった（マタ二六53参照）。ヘブライ人への手紙の中の一節が、このイエスの受容を証明するのにある手がかりとなる。原典の精神をとらえるために、直接、ギリシャ語からの翻訳を示すこととする。

キリストは、肉において生きておられたとき、御自分を自由にし、死から救う力をさえ持

つておられる方に、苦痛と涙の嘆願をくり返しささげられました。この苦しみと涙を従順に受け入れたがゆえに、キリストは聞き入れられました。また、キリストは御子であるにもかかわらず、ご自身の苦しみを通して、人間の定めは受容(hypakoe)によってのみ達せられると学ばれました。そして、完全な存在(teleioteis)に達するという定めを成就なさったので、御自分に従ってくるすべての人びとに対して、永遠の救いの源となりました。その結果、神はキリストをわれわれの大祭司に任命されたのです(ヘブ57-9)。

そこで聖ルカが伝えている、イエスの最後のことが完全な自己放棄の叫びであったということは怪しむに足らない。イエスは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と叫んだ(ルカ23:46)。ここに表明されているのは、根源的な人間の自由である。すなわち人間のあらゆる探求事項に究極の意味を与え、あらゆる失敗の理由を知っている偉大な存在に、自己をゆだねることである。日用語となっている「事情が許せば」「神様がお許しになるなら」(God willing)の表現には深い神学的な源があるのである(ロマ10、一五32、一コリ四19、一六7、使一八21、ヤコ四15参照)。ここではすべて、人間の核心に据えられているのは「わたし」ではなく、(聖なる)「あなた」である、ということが前提とされている。人間の自由というのは、この人間の核心に向けられた場合にだけ起こるのである。そしてその時、神の意志が実現

され、神の国が身近なものとなるのである。⁽⁷⁹⁾

天におけるように地の上にも

中東では、また旧約聖書の言語では、「天と地」ということは、神の創造されたものすべての空間を定義するものとして使われている（マタ五18、二四35参照）。それゆえに神は「天地の主」（マタ一一25）と呼ばれ、復活したキリストは天と地の一切の権能を授けられるのである（マタ二八18）。「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」とは、それゆえに、神の意志がつねに、どこにおいても、おこなわれるように、という意味である。神の国とは、この創造された地のどこか特定の地理的部分であるとか、これからそういうところに出現するというものではなく、この創造された世界（天と地）が変容した結果の全体なのである。神の意志は、神の造られたものの全体に及んでいる。われわれの側においても、われわれの回心、われわれの聖化（それは神の意志を人間の側で実現することである）は、人間生活の特定の局面にのみ限定されてはならない。すなわち心の分野に限るとか、もっぱら宗教的、倫理的側面に限られるというようであってはならない。聖化は、われわれの存在が及ぶすべての

局面において、起こらなければならないのである。

今日のわれわれは、特に構造的な罪、社会的公正という事態に直面している。人間の社会的関係において、つまり経済的、政治的、文化的機構において聖化を実現することが最大の眼目である。神の国を目ざす変容、変革から除外されるいかなる領域、空間もない。新しい天地の発酵は、あらゆるところから始まるのである。これらの全ての要求は「天におけるように地の上にも」——言葉を代えれば「神の意志がすべてのものにすべての次元に行われる」——ということばに密接につながっている。

さらにわれわれは、この相互関連を示す表現、「天におけるように、地の上にも」を手がかりに、上述の所論をふくらませることが可能となる。聖書によれば、神はすでに天を統治しておられる。天に神の玉座がある（イザ六六1、マタ五34〜35、詩一〇三19〜21参照）。天の住人たち（天使と心正しき人びと）はすべて、詩編一〇三編に明確に記されている通り、神の意志を完全に行っている。他方、地上は、今なお神の意志が妨げられ神が歴史の上で忍耐と寛容を示している場所である（ロマ二4参照）。そこで「天におけるように地の上にも」という願いの意味するところは、すでに天において行われる御心が、同様にこの地上においても、出来るかぎり早く、成されるように、ということなのである。天においてすでに栄光の座を占めている王国が、この地の上においても是非構築されますように！ オリゲネスは主の祈りの中のこ

の部分について、すぐれた解釈をほどこしている。「神の意志が、天におけると同様、この地上においても成された時、この地はもはや地上ではなくなる。……その時われわれはすべて、天上にいるのである⁽⁸⁰⁾」。

かくてすべてが、完全な調和点に到達する。そこでは天が地に降り立ち、地が天の高みへと上げられる。そしてその時、終末が来る。すなわち「神がすべてにおいてすべてとなられる」(一コリ一五28)のである。この世界が出現するまで、われわれはあらゆる機会をとらえ、あらゆる場所で祈るのである。「御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも!」と。